

COLUMN

鎌倉の猫事情
第三十六話

ミーン ミーン ミーン

最後の最後の力を振り絞るかのよう、アブラゼミが鳴いています。今年のようにいったい夏は来るのか来ないのか分からないような年には、さぞかし暗い土の中で気をもんでいたことでしょう。待っているうちに夏の王者であるはずのアブラゼミを差し置いて、ヒグラシがカナカナと鳴きだしていましたし、今年はずいぶん夏なして秋になるのかと思われましたが、やっと、例年どおりの暑くて騒々しい夏がやってきたようです。アブラゼミは、気温が30度に満たないと鳴かないと言われますが、この先短い夏の数日間地上での色々な大切な用を足さなければならぬのです。夜まで鳴いています。しかしすぐに力尽きてばらばらと落ちてきてしまい、よせばいいのに弱りきって方向を失った哀れなアブラゼミは、我が家の3畳間の窓から勢いよく飛び込んで来てしまうのです。我が家に待ち受けているのは、憐憫の情の欠けりもなく、夜中にキラリ目を光らせてねぞべっている猫達です。彼らの餌食になった哀れな蝉たちは、あのしなやかな爪の下で2日間程瀕死のまま過ごします。冷酷な弱肉強食の世界です。しかし、その年は少し違っていました。まさに崖っぷちに追い詰められた感のあるグーニー君自身が、アブラゼミの運命となりつつありました。それは愛妻スイービーを奪われる危機でもあるのです。グーニー君の築いた幸せは風前の灯火です。そして、ある夏の晩のことでした。彼らの形勢を完全に逆転する出来事がおこったのです。いつもと変わらない晩でした。子猫姉弟はじゃれあって遊び、スイービーは子供たちを眺めて静かに寝そべり、暗い表情のグーニーはそのかたわらで横になっていました。その時、窓ガラスが小さくカタカタと揺れ、ガラス越しに、大きな黒い影が現れたのです。グーニーの表情が一瞬に変わりました。居合わせた私は、そのグーニーの真剣な表情を見てとり、そして心の中で小さくつぶやきました。『行くんだね』と。そして、灰色猫が待ち受ける窓を開けました。窓辺にはニヤリとした表情で、憎い灰色猫が私達全員を見下ろしています。ほんの一瞬の間でした。グーニーはそれまで寝そべっていたベッドに立ち上がり、力強く、そして大きく後ろ足を蹴ってジャンプしました。まるで空中を飛ぶように、窓辺にいた私の目の前をふわりと横切り飛び出しました。もちろんそれをただ待っている灰色猫ではありません。いつの間にか、彼は屋根に飛び降り、グーニーを迎え撃つ体制を整え、最後の仕上げだと言わんばかりに、立ちはだかっていたのです。 ——— to be continued



Café

3 1980年初頭 下北沢にて



1980年、あの夜の原宿で見たシックな教会は、もうとうに、円筒形を組み合わせたような、不格好で、シックとは程遠い白いビル、『ラフォーレ原宿』に姿を変えていた。少し危なく、少し汗臭い70年代のなごりは次第に姿を消し、ラフォーレ原宿は、ファッションビルの先端として、グランバザールと称する安売りに、開店前から多くの若者を集め、その権勢を誇っていたのだが、その頃下北沢はまだセピア色の裏町が残っていた。何しろ南口駅前にはピンクサロンが並び、ハッピーを来た男達が大声で客引きをしている。北口には戦後の闇市場の生き残りのような『アメリカ横町』、踏み切りの脇には、あしたのジョーぱりの貧しいボクシングジム、極めつけは、終電近くになると駅前の小さな植え込み周りに現われる数人のパンパンのお姉さん達。その横には、『この客引きは禁止されています』という立て看板。街のあちこちには古風なお風呂屋さん、線路にへばりついたような小さな店。汚い芝居小屋。この街には正体不明な人達が日本中から集まって来ているようだ。そして、そんな寄り辺のない身の上の人間達が人肌の温もりを求めて夜な夜な寄り合ってくるカフェが街のここかしこにある。井の頭線と、小田急線が交差するこの小さな街にはいつも踏み切りの警笛が鳴っている。夕暮れ時にカンコンカンと鳴り響く鐘の音が、独り暮らしの身に寂しく染みる。自然とその脚は誰か人の温もりのあるカフェへと向かうのだ。南口駅の脇を抜けて線路沿いの裏道を歩き、ぐっと細くなった道に古い連れ込み宿があり、その先の角に、黒いペンキを塗った木造の古いジャズ・カフェ『マサコ』がある。日本のジャズ・カフェ草分けである。なによりジャズを愛したマサコさんが有名だった。中に入るとガラス張りのDJルーム？があり、店の中壁を黒く塗ってある。細長い木のテーブルがいくつか並び、その周りには細長いベンチ。そしてベンチには腕組みをしてジャズに聞き入る青年達。下北沢を離れ、もう長い間訪れてはいない。今でもマサコさんの遺志をつぐ新オーナーのもとで変わらず経営されているという話を聞いた。あの頃まだ元気だった太った明るい笑顔のマサコさんが、街の銭湯で自分で編んだショールを抱いて、『これはあなたにプレゼントするわ！』なんて、番台のおばさんに話し掛けて上機嫌だった姿を、今も思い出す。